

# 勝林寺布報

## 弟子一人ももたず

常陸国河和田報仏寺の開基唯田（ゆいねん）の著『歎異抄』（歎異抄）第六条

専修念仏ノトモガラノ ワガ弟子ヒトノ弟子トイフ相論サフロウランコト モテノホカノ子細ナリ。親鸞ハ弟子一人モモタズサフロガ。

何故かというと、私の力で人様にお念仏を申させるのなら、それは弟子であるといつてもよいでしょう。阿弥陀如来さまのおはたらきによってお念仏申している人を、こんな愚かな私の弟子だというのはまことに途方もないことです。

仏教を開いたお釈迦さまも、生涯その弟子を「共に歩む人」「同じ道を行く人」とお呼びになりました。親鸞さまは「御同朋・御同行とかしづいて」仰せられたと伝えていきます。

私も教師をしていましたが、同僚で退職し老齢になつてからも「あいつは今では偉い地位にあるけれど、昔、わたしの教え子でね」なんて云つていているのを聞くと悲しくなつてしまします。「教えてやつた」という傲慢さ。「教えてヤツタノニ、会つても挨拶もせん」などの恩着せがましさ。こうした師弟関係には後々深刻な問題が出てくるように思います。教化になつた二十年。関東から北陸にかけ沢山の弟子が出来ました。鎌倉幕府のご家人身分の人、その土地の有力豪族もいました。有

名神社の神主さんもいたし山伏の頭領もいません。浮世の権力争いも絡んでいたのかも知れません。他派とのあいだのケジメをつける必要から自ずと自派の「教学」をたてて対抗し始めます。同じ師のおしえからいろいろな学派・流派の対立が生まれてくるのは自然な趨勢かもしれません。幕府権力に取り入つて、互いに非難中傷。訴訟事件さえ起きます。

親鸞さまが京都に帰つてくるや、間を置かずその各派からの訴えが京都へ潮のように押し寄せてきました。手紙で、また直接「十余ヶ国」の境を超えて訴えてくる人もいました。

例えば、「造悪無碍（ぞあくむげ）」といって「如來さまのお慈悲に救われているのだから、ことさら善を勵んだり修行をする必要はないばかりか、どんな悪業もすでに救うと決定して

いるのだから、罪をつくるのはこれが私の宿業。ありのままを生きればよいのだ」とか「お念仏によって既に成仏した。他の諸神・諸仏、また領主などを礼拝しなくてよいではないか」と浮世の権力や他の神仏・諸宗派を誹謗する。そんな極端な非常識さえ聞こえて来ました。

親鸞様は、一々丁寧に返事を書き諫めましたが、恐らく親鸞様は、この現象はみなみな自分の残した足跡のように感じました。しかし思いました。

『愚禿鈔』という聖人八十三才ころの法然

から学んだ学習メモのノートの冒頭には賢者ノ信ヲ聞イテ 愚禿ガ心ヲ顕（アラ）ス 賢者ノ信ハ 内ハ賢ニシテ外ハ愚ナリ 愚禿ガ心ハ 内ハ愚ニシテ外ハ賢ナリ

「賢者」とは法然様のこと。比叡山でも「智慧第一」と崇められていた。しかし先生は教えなかった。ひたすらいろいろな階層の人々と念仏講を営なんで「往生の業ハ念仏ヲモッテ本トスル」。馬鹿のようにそう説くばかりだった。その法然さまの主著とされている『選択本願念仏集』も弟子のなかの学問に優れた人達の聞き書きとしてまとめられたもの

であると聞く。みなさんが存知の『正信念佛偈』（念佛の教えを伝えたお釈迦さまやインド・中国・日本7人の高僧がたの教えと徳を讃えた百二十行の歌。その最後まとめて四行で親鸞さまは次のように締めくくつておられます。

弘教ノ大士（お釈迦さまのこと）宗師（七人の高僧）等 無辺（ホトリナイ無数）の煩惱に獨りきつた者たちを残り無く救おうと働きづけて下さっている。僧侶といわす俗人といわず、この今を生きているもの、みなすべて同じ道を行く者、みな同心で、この勧めくださるおしえを、唯だ一筋に信じさせていただきます。と。

九日（火）出石但東仏教会

花まつり実行委員会  
十日（水）観桜会打ち合わせ会

一一日（木）福音 剛宅 五十回記念  
一二日（金）湯口時男宅 一周忌

一三日（土）観桜会  
一四日（日）藤田正吾宅 二回記念

一四日（日）出石組総代会 役員会  
一五日（月）富島重和宅 一周忌

一六日（火）みのりを聞く会  
一七日（水）出石組 総代会総会  
一八日（木）田村哲夫宅 三回記念

一〇日（土）富島重和宅 一周忌  
一一日（日）湯口時男宅 一周忌

和尚さん

インドの古語ウパーデイヤーヤの俗語で「師・師匠・先生」の意。

天台宗系では「カシヨウ」（源信カシヨウ）。真言宗では「ワジョウ」。但し真宗で「ワジョウ」というのは「和上」と標記して

宗学者の学階名。禪宗系は「オシヨウさん」これを訛って「オツさん」。ほかに寺の住職を「方丈さん」（鴨の長明の『方丈記』にある隠棲の庵イオリの主をさす）。真宗などて「院家さん」というのは幕藩時代の僧侶の階級（僧官）名であったもの。これを地方では訛って「ゴエンさん」とよんだりする。ほ

かに「院主」（インジュさん）。「住持」（お住持）（オジユツさん）とよんだりする。また、「お上人」（オシヨウニンさん）。

「坊主」（おボンさん）

四月 勝林寺 予定

四日（木）永井 實宅 百ヶ日

六日（土）出石組 組会（勝林寺）

七日（日）光顯寺 永代經法要

九日（火）花まつり実行委員会

十日（水）観桜会打ち合わせ会

一一日（木）福音 剛宅 五十回記念

一二日（金）湯口時男宅 一周忌

一三日（土）観桜会

一四日（日）藤田正吾宅 二回記念

一五日（月）富島重和宅 一周忌

一六日（火）みのりを聞く会

一七日（水）出石組 総代会総会  
一八日（木）田村哲夫宅 三回記念

一〇日（土）富島重和宅 一周忌  
一一日（日）湯口時男宅 一周忌

一二日（火）みのりを聞く会

一三日（水）出石組 総代会総会  
一四日（木）田村哲夫宅 三回記念

一五日（火）富島重和宅 一周忌  
一六日（水）湯口時男宅 一周忌

（敬称略）

## 師弟関係の悲劇

親鸞さまの長男「善鸞」。

当時一般社会では師弟関係の最大要件は「面授口訣(めじゆくびつ)」、直接、顔を合わせて学び、口ずから直接に教えていたぐりとうことが重要視された時代。関東を離れて京都へ帰った親鸞のこころの傷痕(きずあと)である「関東教団の内紛、相互対立」を説論するため派遣された最も信頼に足る長男善鸞。その人がその困難な任を果たすため「私こそ親鸞の面授口訣の弟子」ということを武器にしたのは当然だったかもしれない。しかし、当然それへの抵抗反発。そのため善鸞は、やむをえずいろんな対抗措置や反論理論をくりひろげざるを得ない。

こうして世にいう「ミイラとりがミイラとなつて」いったのだろう。みずからとんでもない異端異義に陥ってしまった。親鸞さまは

「獅子身中ノ虫」として「義絶(ぎぜつ)」してしまわなければならなかつた。八十三才の頃と云う。生涯最大の悲劇であった。

親鸞さまは、「親子の愛」乃至「人の愛」

と如来様からいたたく慈悲(聖道の慈悲と淨土の慈悲)について深刻に考える見えなかつた。唯田の『歎異抄』第四条には

慈悲ニ聖道・淨土ノカワリメアリ。聖道ノ慈悲トイウハ、モノヲアハレミ・カナシミ。

ハグクムナリ。シカレドモ思ウガゴトクタスケトグルコトキワメテアリガタシ。淨土ノ慈悲トイウハ、念佛シテ、イソギ仏ニナリテ大慈大悲心ヲモッテ、思ウガゴトク衆生ヲ利益スルヲ云ウベキナリ。今生ニイカニイトオシ不憫ト思フトモ、存知ノゴトクタスケガタケレバ、コノ慈悲、始終ナシ。シカレバ念佛申スノミゾスエトオリタル大慈悲心ニテ候ベキト云々。

勘当してもなお断ち切れない凡情。お念佛申すなかで初めて出会つた親子であつた。学問として教えを理解する。理論として他を説得する。宗教を「学解(がくげ)」する

ことを自他に戒めてきた親鸞さまであつたが、いわゆる「弟子」たちの間では後々現代にまで伝承されてきていることを嘆かざるを得ません。相手を論破するため経や論のご文を引き合いにだして戦ういわゆる「会読・論議」が真宗理解の本道になつてゐるのは悲しいことです。

## 最近気になることば

「実家」自分の生まれた家(故郷の家)のことを云うようだが、本来は「里」。

(郷)(サト)又は「生家」と云つべきである。

「実」の反対語は「仮」「虚」。仮に住んでいる家とか、本来住むべき家でないところ

と云う意味になつてしまふ。最近の若いお嫁さん感覚では、嫁家は「仮の家」なのだろうか。本当の家は、生まれた「お里」の家なの

だろうか。だから、結婚して何年立つていても簡単に離婚して生まれた親元へ帰つて行くのだろうか。

確かに東洋では古来、「女は三界(欲界・色界・無色界)に家なし」と云うが。それと今

の「私の実家」というのは全く意味が違うと思うのだが。

なお、日本の法律には「実家」ということは使用していないことです。

多々(たた)

第一回 一四〇〇

## 観桜会

申し込みは、地区的仏婦評議員さんへ

# 学校あめでとう。

坪口 中嶋唯斗さん(英樹様宅)  
正法寺 山田貴賀さん(はな子様宅)

栗尾 大月智弘さん(辰夫様宅)  
小人 植田みのりさん(勝治様宅)  
渡見 湯口叶望さん(高雄様宅)

勝林寺門徒春のつどい

四月一二日(土)



どすん

このコーナーでは、我が家  
の長男つまり勝林寺の後  
継住職を話題にすること  
が多いのですが、うちに  
はあと二人大事な子がい  
ます。二人のうちの下の  
子(名前は「入海」と書  
いて「いるみ」と読みます)  
が三月に中学校を卒業し、地元の高校に進学  
しました。

手前味噌ですが、三月十二日に行われたこ  
の子の卒業式がとてもいい卒業式でした。

「いい卒業式」と「いい卒業式」必ず「去年は……」  
とか「お兄ちゃんの時は……」とか、ほか  
のものと比べて使われることが多いのです  
が、そうではありません。素直にあります  
に「いい卒業式だった」と感じたのです。  
何が「いい」と感じさせたのか考えてみま  
した。思い当たるのは、式に参列した人(卒  
業生は勿論、在校生、先生方、来賓の方々、  
保護者)が、自分たちみんなが、この場にな  
くてはならない存在であると感じられる卒  
業式であつたからではないかと思うのです。

何か特別な企画をされたわけではありません  
んだ。ただ、あらゆる場面から「感謝」という  
気持ちが伝わってきました。みんなが大切に  
されていました。「来てくださつてありがとうございます」「招いてくださつてありがとうございます」「導いてくださつてありがとうございます」「育てて  
くれてありがとうございます」「導いてくださつてありがとう」「仲良くしてくれてありがとうございます」「いい」「いい」とは、他の人やものと比べて存  
在するのではなく、ありのままから感じるも  
ののだと改めて気づかされました。もう一  
つ手前味噌、入海は、とっても「いい子」で  
応えたその心意気。

第二部 一七〇〇

## 観桜会

お勤め、法話の後、本堂に咲く桜を見な  
がら、お酒を酌み交わし、こちそうを食  
べて、懇親を深めましょう。

勤當してもなお断ち切れない凡情。お念佛  
申すなかで初めて出会つた親子であつた。

学問として教えを理解する。理論として他  
を説得する。宗教を「学解(がくげ)」する